

4 事業者による成果報告

(1) 一般社団法人三陸まちづくり ART

○太田被災者生活再建課長

では始めに、一般社団法人三陸まちづくり ART によるご報告となります。それでは補助事業の取組成果についてご説明をお願いいたします。

○一般社団法人三陸まちづくり ART

一般社団法人三陸まちづくり ART です。今日はよろしくお願ひします。

本日は、アートを通じた多世代の交流の継続的な取組によって、被災者の孤立を防ぎ、心の復興に繋がっていく、その実践としての本事業の成果をご報告いたします。

背景として、被災地にはいくつかの課題がございました。

1つは、防潮堤の建設によって景観が大きく変わらして、住民から、町が暗く感じる、さみしくなったなどの声が聞かれるようになったということです。

もう1つは、災害公営住宅などでの暮らしが長期化する中で、コミュニティが変わり、その希薄化や高齢者の孤立が進んでいるというような課題です。住民からは明るいまちに戻りたいというような切実な声が挙がっておりました。

そこで私たちは、特別な技術を必要とせず、誰でも参加できるモザイクタイルアートを用いて、市民が作品を作り、防潮堤などの地域の公共空間に展示するという取り組みを行いました。

今年度はさらに、漁業者や海洋ゴミ問題に取り組む地域団体とも協働し、養殖のフロートなどの海洋ゴミを活用したアップサイクルアートにも取り組みました。これは、いつも使用している廃プラスチックのベース板の代わりにフロートなどを活用したものです。

ワークショップには、子供から高齢者まで多様な世代が参加し、今年度は合計 10 回の作品の制作に関わるワークショップを実施しました。参加した高齢者の約 4 割が一人暮らしの方であり、社会との繋がりが希薄になりがちの方にも直接の機会をお届けすることができたと思います。

製作した作品は防潮堤だけではなく、今回は郷土芸能の芸術祭ですとか、舞台公演の会場など、地域の催しとも連携して展示をしました。展示作品にはアウトリーチで作品製作に参加した市民をはじめ、多くの地域住民が関わってくださり、製作に参加した人と、それから催しへの来場者が交流するような機会も生まれました。

今年度の参加人数は、実人数で 1,650 人、延べ 2,540 人となりました。そのうち、災害公営住宅などに居住する被災者の割合が 55.4%となっております。

参加者のお話を伺う中で、今年度新たに感じたことがありまして、これは大船渡で主に活動しているからだと思うのですが、昨年のも林野火災の影響についても、時折感じるがありました。例えば、大船渡市に綾里という地域がありまして、そこで復旧作業のために、みちのく潮風トレイルという、歩いて通れるところの一部が通行できなくなっているなど、そのようなことを心配している地域の人々の声、外国人の観光客が少しずつ増えてきていたところなのですが、その足が遠のくのではないかと、地域の孤立がさらに深まるのではないかと、ということをお心配される声が聞かれました。また、東日本大震

災で高台に移転された後、今回の火災の被害に遭われた方もいるということを伺いまして、こうした方々の心の復興にも引き続き取り組んでいく必要があるなど感じました。

今年度の成果としては、アート製作を通じて世代間交流が生まれ、高齢者が笑顔を取り戻すなど、被災者の心の復興に繋がる場を作ることができた点です。また、特設ホームページや新聞報道を通じて、本事業を知っていただき、新たに協賛のお話をくださる地域の企業もあらわれるなど、地域主体の事業として継続していくための基盤が生まれつつあると感じています。大船渡や陸前高田では、若い世代も運営サポートに関わるようになってきました。こうした若い方々と、今後も続く心の復興にこの事業として寄与していければと思っております。ご清聴ありがとうございます。

○太田被災者生活再建課長

ありがとうございました。それでは、委員の皆様方から、ご質問やご意見をお願いいたします。

○委員

この事業に参加された被災者の方々は実人数で1,650人ということですが、うち、高齢者の方、それから18歳以下の子どもの方、ざっくりでいいので、何人ぐらいだったか教えてください。

○一般社団法人三陸まちづくり ART

集計を今取っているところなので本当にざっくりなのですが、高齢者の方の中には、お住まいが防潮堤や災害公営住宅などがある地域の近くにありまして、そういうところを訪れて、日々、これらの作品をご覧になるような方達も含まれています。従ってそれらを含めると、3割ぐらいの方が高齢者の方として参画されていると思います。子どもはどのぐらいまでの年代、18歳ぐらいまででいいでしょうか、それだと3割弱の比率かなと思います。

○委員

高齢者の方が約3割とのことですが、そのうちアウトリーチで高齢者の施設の方に向いていったところもかなりあると思うのですが、そのうち、何人ぐらいになるのでしょうか。それから18歳未満の子どもさんも同じように、子ども園とか保育園にこちらから出向いていった割合というのは、そのうちどのくらいでしょうか。ざっくりで結構ですので教えてください。

○一般社団法人三陸まちづくり ART

大体の人数でお答えすると、アウトリーチでお邪魔したところで、高齢の方と関わって作品製作に取り組んだ方はおよそ80人程度。子どもたちについてはアウトリーチでは60人ぐらい、とてもざっくりなんですけどそのぐらいだと思います。

○委員

そのアウトリーチ以外の方というのは、現場といいますか、防潮堤での作業とかそういったところに参加した方という捉え方でよろしいですか。

○一般社団法人三陸まちづくり ART

はい。自由参加というか申し込み不要で、地域で行う出入り自由のフリーワークショップというのがありまして、そういうところに参加された方々と、それから防潮堤など展示に参加された方々、それから作品タイルを並べた後に仕上げ作業というのがあって、それに割と時間を要するのですけれども、そこにいつも地域の方に関わっていただいて、そういったところに関わった方々が含まれています。

○委員

ありがとうございます。

○委員

釜石高校の美術部の方も参加をしたということですが、この美術部の方の参加については、高校に対するどのような働きかけをなさったのか、またこの美術部の方々はこの事業の中でどのような役割を果たされたのか、少し詳しくお話しください。

○一般社団法人三陸まちづくり ART

はい。高校と関わるときに一番初めにお話を伺うのが、たいてい美術部があれば美術部の顧問の先生なのですが、今回も美術部の先生にまずお声がけをして、作品製作を、こういう事業をやっているのですが、一緒にやりませんか。そして釜石では長期展示ではないのですが、イベントで作品の展示を行いますので、一緒に展示をしませんかというようなことをご提案をさせていただき、作品を一緒に作り、それを会場で展示するのを高校生の皆さんともさせていただきました。

○委員

私、一昨年前でしょうか、サン・アンドレス公園には行ってきましたが、釜石の場合はこの TETTO の中での展示ということで、特にサン・アンドレス公園のような、防潮堤に何か作品を展示するということはなさらなかったということよろしいですか。

○一般社団法人三陸まちづくり ART

はい。釜石でも申請がもしこの先通れば、そのような可能性もあると思うのですが、例えば陸前高田のように、地域によっては条例であるなどいろいろな問題で、今後防潮堤の展示が難しいところもありまして、そういうところを鑑みて、防潮堤に限らない今後の可能性というのを考えており、今回、試みでこのようなことをやりました。

○委員

はい、わかりました、ありがとうございます。

○委員

たくさんの方が参加してくださったようで、よかった思うところなのですが、報告の中にあった参加人数のところ、教えて欲しいことがあります。まず1つが、その他避難者、これはどういう属性の方でしょうか。

○一般社団法人三陸まちづくりART

陸前高田は市営もあったような気もしてちょっと定かではないのですが、割と聞くのは県営の災害公営住宅の方です。みなしのアパートなどは詳しくは存じ上げません。

○委員

今はみなしのくくりはないですね。その辺はどのように捉えられ、区分されていたのでしょうか。

○一般社団法人三陸まちづくりART

参加者のお話を聞いていて、区分の中にはそれこそ当てはまらないが、ご自身が被災をしたと感じている方がいるなということで、アンケートの選択肢を昨年から増やしているのですが、もちろん住むところも、災害公営住宅に住んでいてという方は、そこに入れるようにしています。

○委員

分かりました。ありがとうございました。特別事業でもありこの数字のところは、成果としてのラインの1つの指標になるのでお伺いしました。併せてもう1つ、その下段の表の全体人数のうち、特に孤立している方というところの実人数が160人ですが、どのようにこの数字を捉えられたかについてお伺いしたいです。

○一般社団法人三陸まちづくりART

年齢的に高齢であるとか、きっと退職をされているだろうという年代で、一人暮らしをされている方というのはこちらに入れさせていただいております。それから地域として、もうほとんど人が住んでいないようなところからいらっしゃったと伺えば、それも含めるというようなことをしております。あとは災害公営住宅に住まわれている方、今回ちょっとワークショップにお誘いしたりもしているのですが、いつも窓口になってくださる方が、そこに住んでいる高齢者の方があまり外に出てこなくなっているというの伺って、その辺りも聞き取りをしながら、分かる範囲で数えています。

○委員

私、最近すごく興味のあるテーマというか取り組んでいるテーマが孤立孤独、孤立予防なので、今の孤立とか孤独というところの捉え方は、今後も多分、事業継続していかれるのでしょうから、少し考えたほうがいいのかと思います。あと1個だけ、今その話を聞いた中で、この事業はこれまで何年ぐらい続けておられますか。

○一般社団法人三陸まちづくり ART

今年度が終わると4年ぐらいです。

○委員

その中で一貫して、被災地が抱える切実な声や地域の課題というところがあると思うのですが、ご自分たちが事業を重ねてきている中で、それは改善しているという実感はありますか。或いは毎年やはりその課題は、なかなか改善することができず、ドーンと常にそこに横たわっているという捉え方でしょうか。

○一般社団法人三陸まちづくり ART

少しずつ変わってきていると感じています。タイルアートのことが地域の方々に少しずつ認知をされるようになりまして、ワークショップに作品を作る側として関わる方の他に、運営の方をサポートするということで、大船渡とか陸前高田に住んでいる若い方が参画してくれるようになる、また地域の方で運営のサポートに関わってくれる方が少しずつですが増えてきているなど、改善はされているかなと感じています。特に、防潮堤のタイルアートなのですけれども、地域の人が実際に作った作品がこのように飾れるということに、とてもポジティブな感想をくださる方も増えてきているなど感じています。

○委員

はい。ありがとうございました。

○委員

私もこの事業参加人数については気になっていて、私も沿岸地区に住んでいるのですが、民間賃貸住宅居住者の参加数は少し多いのではと感じます。というのが、陸前高田市の場合ですと、公営住宅に住んでいる方が結構多く、あとは自主再建とか防災集団移転の方がほとんどで、その場合、多くの方は災害公営住宅居住者にあたると思います。従って、民間賃貸住宅居住者と、また仮設は今はないと思うので、これらは確認しておいた方がいいと思います。

○一般社団法人三陸まちづくり ART

承知しました。ありがとうございます。

○委員

もう一つ、大船渡と陸前高田で若い人が参画しているというのは、他の例えば釜石とか宮古ではどうなのでしょう。

○一般社団法人三陸まちづくり ART

釜石とか宮古は、昨年から高校生さんと関わるようになったところですが、こ

これまでの大船渡が中心だった頃と比べるとまだ関わりが浅いので、これからかなと思っています。やはり 20 代、30 代の普通に働いてらっしゃる方と、大船渡を拠点にしている私たちが今、密に関わることがまだ難しい段階で、去年は宮古市でも防潮堤で展示をするにあたって、宮古の団体さんと共同で行ったのですが、もし今後、範囲を広げて活動していくとなったときには、その自治体ごとの団体さんと協働してやっていくということがこれからの活動に繋がるのではないかと考えております。

○委員

ありがとうございます。関連なのですが、大船渡と陸前高田の若い人がどのような形で参画されているのか、もし分かれば教えてください。

○一般社団法人三陸まちづくり ART

はい。主にタイルを並べて皆さんが作ったものの仕上げをするときの仕上げ作業であるとか、防潮堤に展示するときの設置作業などに関わる方が少しずつ増えております。なかなかワークショップは、特にフリーワークショップですと日曜日などの開催なので、そういう若い方もそのサポートとして入れるところはあるのですが、アウトリーチは平日に行うので、普通に働いている方や学生さんには、一緒にやっていただくのはちょっと難しくなっているというところですよ。

○委員

今年、養殖フロートや海洋ゴミを活用したという報告もあって、地元の人に関わる一端にもなっていると思ったのですが、これを今後、どのように事業に組み込んでいけるか、また続けていけるかというところで、来年以降の見通しというのをお聞きしたいです。またそれに加えて教えていただきたいのが、数字は難しいと思うのですが、これまで4年間続けておられるのでその認知度的なところ、リピーターというか、これを楽しみにしている方が、実感としてどの程度いると感じているかについて教えてください。

○一般社団法人三陸まちづくり ART

まず海洋フロートや今後の見通しにも関わってくるころではあるのですが、やはりこういった文化活動について、その活動のみを行っていくのには、資金面などの課題があります。

このような海洋ゴミのようなことに着眼したのは、地域の方々、特に漁業などに関わっている方々と協働したいということもある一方、そのような海洋ゴミが問題であるというのをあるダイバーさんから伺いまして、リサイクルとかアップサイクルというような事業であるとか、一見文化とはかけ離れているかもしれないような事業をこの先考えていく可能性があるのではということで、海洋ゴミの活用をさせていただいております。

今後の見通しについては、直近のところでは、民間の団体さんの助成ではないのですが、支援をしてくださるシビックフォースさんという団体からの契約をいただいているほか、地域でもまだ少額なのですが企業メセナの助成ということで、協賛をしてくれる団体さんも出てきているので、今後、地域の企業の協賛依頼にはまわって歩きたいと思

っているところと、また自分たちで自走できる仕組みも作っていきたいと思います。

2020年からずっと続けてきたのが大船渡なのですが、大船渡では「ああ、あれね」と言ってくれる方が増えてきているのと、またワークショップにリピートで参加してくださる方が一定数はいると感じております。

○委員

最後に2つ、蔵ハウスと一緒にやられたというふうにお聞きしました。蔵ハウスは社会福祉法人がやられている小規模特別養護老人ホームではないかと思うのですが、これからもしこの事業を進めていくのに、参考になればということでの話しですが、今、社会福祉法人全てに、地域の公益的な取り組みを積極的にやりましょうということが法律的に義務づけられています。皆さん方が行っている事業もその地域での公益的な取り組み、つまり、特に社会福祉法人であれば、高齢者の孤立対策とかそのようなことに役立っているわけですので、各地域の高齢者施設などを運営している社会福祉法人に、宮古であったり釜石であったり、大船渡は成仁会ですね、陸前高田市にも社会福祉法人はありますので、そういうところに積極的に呼びかけることはあるかなと思います。

あともう1つ、もしここに、障がいを持った方々が参加できる枠組みがあると、福祉的な視点から言えば、多様な方々の参加ということがもっと実現するのではないかと思います。以上です。

○太田被災者生活再建課長

委員の皆様、どうもありがとうございました。それでは質疑を終了したいと思います。

以上で、一般社団法人三陸まちづくりARTの報告を終了いたします。どうもありがとうございました。

(2) 釜石まちづくり株式会社

○太田被災者生活再建課長

それでは次に、釜石まちづくり株式会社による報告となります。それでは、補助事業の取り組み成果について、ご説明をお願いいたします。

○釜石まちづくり株式会社

釜石まちづくり会社と申します。よろしくお願いたします。

私どもの「わたしの町のご近所新聞をつくろう」という事業について報告いたします。

取り組みの概要としては、スライドに記載させていただいているような地域の皆さんの現状、課題を踏まえたご近所新聞づくりをとおして、普段住んでいる地域への感謝を持つきっかけづくりや、日常の発見、楽しさを共有できるコミュニティを育む第一歩となることを目的に取り組みました。

流れとしてはまず、各地域で「お茶っこ会」や「ご近所新聞をつくろう会」を実施し、A1サイズのご近所新聞を製作し、全地域の新聞が完成した後に、釜石市、大槌町内で展示会を実施するというものです。取り組みの効果、特徴に関しては時間の関係でご覧のとおりとなりますので、説明は割愛をさせていただきます。

実際の活動としては、ご覧のとおり、釜石市内の唐丹、平田、鶴住居の日向の3ヶ所、大槌町内の桜木町、姉沢、上町の3ヶ所の計6ヶ所で、ご近所新聞づくりの会を実施しました。昨年度に引き続き2回目のところと、今年度初めてのところがございます。

ご近所新聞づくりのワークショップでは普段と変わらない要素もありつつ、外部の人間である私達が入ることによっていつもと違う視点での話題が出るや、意識する、口にすることもない話題が出るなどして、結果的に日常の小さな変化に目を向けるや深く知るといふきっかけになっているということがあります。

また、新聞記事になるということを考えるプロセスをとおして、改めて自分が地域に対してどう考えているのかであるとか、やはりこの地域が好きだなという気持ちを再確認するというような場面も多々ありました。参加者の中には、ご近所新聞づくりに参加した後、ご自身で所属されている老人クラブでも壁新聞を作ってみましたという方もおられました。

取り組み内容の2としては、ご近所新聞の展示会を実施しました。大槌町ではシーサイドタウンマストにて、釜石では釜石市民ホールTETTOにて、ご覧の期間で開催をしました。また計画では公民館を会場とした展示会も計画していたのですが、その際、単なる展示ということだけではなく、地域の皆さんが集まるような機会に、こちらの方ででき上がった新聞を全地域分お見せする、またこういう話題がこういう記事になりましたというフィードバック会のようなものをさせていただくということを実施しております。

ご近所新聞づくりに参加された方々は、展示会で、地域がどうなっているのかについて気になっている方が多くいらした印象があります。また、活動に参加されていなかった方や取り組みを初めて知る方にとっては、自分の地域だったらということを考えるきっかけになっているものと感じております。

達成状況についてはご覧のとおりですが、特筆すべき点を中心にご説明をいたします。2番の展示会のところです。展示会に来た方が、自分は一度もお茶っご会に参加したことがなく億劫だと思っていた。けれどもこのご近所新聞をみて、人との繋がりであるとか交流が、心身の健康に繋がるのだということを実感したので、これからは自分の地域の集まりに参加したいというような声をいただいたりもしました。他者との繋がりや生きがいを持って生活するっていうことは、日常生活ではあまりイメージがつきづらい部分ではあると思うのですが、新聞を通じてそういったところを実感していただくことができたのではないかと思います。

まとめですが、先ほども触れたのですが新聞づくりに参加された方が、老人クラブで自分たちもちょっと作ってみようということを取り組まれたりなど、自発的に取り組む動きが生まれてきているということ、またそれを受けて、新たな層の巻き込みや活動主体につながっているということは、実感しているところです。

参加人数ですけれども、360名の計画に対して展示会の来場者を含めて425名の方に参加をいただきました。特に孤立している方というところで、先ほど話題にあがっていましたが、災害公営住宅にお一人で住む方ということで設定をしております、その観点での数字はこちらのとおりになっています。

今後の事業の見通しとしては、計画のときと同じなのですが、被災者、地域住民が情

報の受け手であるだけでなく、発信者としての一面も持てるような取組というところを図っていきたいと思っております。以上です。

○太田被災者生活再建課長

ありがとうございました。それでは、委員の皆様方から、ご質問やご意見をお願いいたします。

○委員

今日の報告会の開催前に、A3で印刷したものを参加した皆さんに届けに行ってきたとのお話でしたが、参加者の方が受け取った感想や反応について教えてください。

○釜石まちづくり株式会社

計画の当初ではA3サイズでの印刷は想定していなかったのですが、活動の中で感じる場所であるとか、鹿野委員にも視察に来ていただき担当の皆さんとお話をさせていただき中で、手元に残ってそれが使える環境になるといいのではということで、追加でA3サイズのもの印刷を入れさせていただきました。結果として、昨日も電話をいただいてお話しをしたのですが、手元に残して自宅で眺めていただく、またふとしたときに目に入るきっかけを作るといところが、参加いただいたご自身にとっても良いことではあると思います。その他に、これをツールに、例えば、誘っても来てくれない方が一定数いるということはいろんな地域で伺っていますが、「こういうことをやっているから、あなたも1回来たらどうか。」というような、新たな層を巻き込むためのツールとして使わせてもらいたいという話しも伺っていますので、効果的なものになったのではと感じています。

○委員

参加人数のところなのですけれども、先ほどのお話しだと、展示会に参加した方も含めて425名とのことでしたが、371名のうちどのぐらいの方がその展示会を見に来たということかでカウントされたのか、今お分かりであれば教えてください。

○釜石まちづくり株式会社

1人単位でのデータが今手元にはないのですが、ワークショップや取組みの方に参加いただいた人数が計画で120名のところに大体150名ぐらいの参加があって、それを差し引いた人数が展示会に参加いただいた人数ということになるので、概ね220名程度ということになるかと思えます。

○委員

関係して、全体の参加人数の計画は災害公営住宅60名の地域住民300名で、計360名ですね。

○釜石まちづくり株式会社

そうです。全体の人数は展示会に来ていただく人数も含めて 360 名です

○委員

実績のところの54名というのが災害公営住宅で、私も視察に行かせていただきましたが、そこに地域の方もおいでになっていたようでしたので、この地域住民のうち、ワークショップに参加した方と展示会に参加した方の人数が見えるとよいと思ってお伺いしたところでした。

○釜石まちづくり株式会社

承知しました。そこまではこちらに明記していなかったのですが、アンケートでは地域の中でもどういう属性のお宅にお住まいかというところはとっているのですが、そこも改めて今後整理をさせていただきたいと思います。

○委員

はい、ありがとうございました。

最後に先ほどの団体さんにもお伺いしたのですが、下の特に孤立している方ということで、計画30名に対して実績54名となっています。これはどのような方を孤独、孤立で心配な方というようにみて数字を取ったのかということと、そこに対するアプローチはどのようにしたのかということについて教えてください。

○釜石まちづくり株式会社

正直に申し上げますと、孤立している方というのは、実際はいろいろな形の孤立があり、こういう属性の方が孤立だというのは、なかなか言いがたいというのが実感としてあります。今回この事業を実施するに当たっては、災害公営住宅に居住されている方、ただ災害公営住宅がもともと住んでいた家からすぐ近くの方だと、コミュニティから離れることなく住める方もいらっしゃるのでは一概に災害公営住宅に住んでいるから孤立のリスクが高いというようには言えないと思うのですが、ある程度決め打ちの部分で、今回の取り方としては、災害公営住宅に住んでおられる方を特に孤立する傾向が強いというように位置付けたところではあります。

あとは、それに対するアプローチですけれども、計画の初期の段階から社協さんや公民館、行政の皆さんとも情報共有や相談をさせていただいておりました。災害公営住宅の居住者の方が参加しやすいイベントであるとか、こういったところに企画の方向性を持っていくといいのではないかとということをおアドバイしながら、事業を行いました。

○委員

ありがとうございます。そうであるので、参加者の人数と特に孤立した方の人数が一緒だということですね。

○釜石まちづくり株式会社

そうです。

○委員

今日、改めて事業の報告を聞いて、この事業が被災者の参画というところになかなかうまく繋がらないでずっときたなというのは、私も長年関わったものとして感じていて、これまでは被災者がずっと情報の受け手としているというようなことが多かったのですが、今回このように、何らかの形で自分たちの方から情報発信するというところに被災者の方も位置付けられたということは、大切なことでありとてもよかったのではないかと思います、

またやはり高齢者の方が多いでしょうからアナログであり、このような新聞というような、紙媒体に自分たちが写るといふことの喜びと言うのでしょうか、多分この方々は、ひょっとすると中には、ずっと大切に自宅にしまっておいて、ここに自分が写っているのだと孫やひ孫に教えるのかもしれない。そのような効果というのとはとてもあるのだらうと聞かせていただきました。

加えて、老人クラブでもやろうということなので、今まではここは被災者という限定でしたが、もう少し広い層の中でも、逆に言えば被災者も含めたコミュニティ全体の中でもこういう活動が継承されていけば、非常にいいだろうなと思いました。

皆さん方はまちづくり株式会社なので、是非ともそのような展開をしていただければと思います。

○釜石まちづくり株式会社

おっしゃる通りで、昨日電話で受けたお話しは釜石市内の地域の方からで、秋田に住んでいる親戚に送りたいのもう一部欲しいというようナリクエストでした。

地域外に送るといふことで、この事業の中での効果というものは強いものではないのかもしれませんが、ご自分の地域が記事になって、ご自分のお名前や顔が写っているものに誇りを持つ気持ちの高揚の部分であるとか、もう少し自分も何か頑張ってみようという気持ちの醸成というところでは、その効果があったものと思います。

私どもの方は、社員に新聞を専門で担当しているものがおりますので、完成するものもデジタルで作ったものを印刷するという形だったのですが、老人クラブでお作りになった方々は、模造紙にコピー機で印刷した文字や手書きのもの、写真を貼って、そこに地域の方がコメントやエピソードを入れるというような形で作られ、こういう形でもやれるのだという、壁新聞と一言で言ってもいろいろあるのだというところは、展示会にもお借りして貼らせていただいたのですが、実感していただけたらと思います。ありがとうございます。

○委員

そういうものを画像としてそちらで保存して、それをまた広く広めるというようなやり方もあるのかなと思って今聞いていました。やはり誰でも、どこかで自分が主役であったことに誇りを持つという、それが昔私はこうだったのだという昔話ではなくて、今

も主役だというところにこの意味はあるのかなというように思って、聞かせていただきました。ありがとうございました。

○委員

この資料で写真を見させてもらおうと、女性の参加の割合が高いと思ったのですが、実際の男女比はどのような感じだったのでしょうか。

○釜石まちづくり株式会社

明確な数字で男女比というのは今手元にないのですが、おっしゃる通りで、女性が圧倒的に多いです。それをやはり地域の皆さんも、課題というか、もう少しお父さん方も参加してくれたらいいのにとというのは、いろんな地域で聞かれています。

今回、釜石の唐丹で実施したときに、ミズキ団子づくりのイベントのところにお邪魔をしてワークショップを一緒にさせていただいたのですが、ミズキの木を切ってくるという役割をお父さん方が担っていて、そこでの男性の参加というのはいつもより多いと聞いておりました。地域としても課題と思っているところに、私どもの方での特別な声かけ等は今回行わなかったのですが、結果的に他の地域での開催よりも男性の参加割合が多かったところではありますので、そういった部分も今後活動を進めていくうえで気にしたいところです。

○委員

陸前高田市での事業の話ですが、このようなことをやると参加者のほとんどが女性で、男性の方が孤立しているような印象があります。ただ今回の新聞の中で大槌の上町での健康麻雀があるのですが、陸前高田市の心の復興事業でも健康麻雀というのをやっています、それだと他の事業と一線を画すといいますか、男性の参加率が非常に高くなります。他の地区にもこの新聞を見せるなど、このような取組もあるということを広めることで、特に男性の孤立が防げるのではないかと思いますので、このミズキ団子や健康麻雀などの取り組みを広めてもらえればと思います。

○委員

私も数少なくサロンに参加させてもらったことがあるのですが、やはり外部の人に話を聞いてもらえるというのが恐らくとても嬉しいのだろうと感じましたし、またこのように話したことが形になるという楽しみもあったと思いましたので、このような活動はぜひ継続して頂きたいというのが要望としてあります。

復興事業がどんどん小さくなり、支援者がいないとサロンが続けられず、この後どうなるのかといった声もよく聞こえてきますので、まわって歩いて希望があったらこういう事業もできますよというのを、まちづくり会社さんなのでぜひして欲しいと思います。そのあたりについて、来年度以降こういうことができそうだということがあれば教えてください。

○釜石まちづくり株式会社

地域でも来年もあるのかということを知っていただくことはありますが、お約束できるものが現状では特になくという状況ではあります。ただおっしゃっていただいたように、震災から今年11日で15年というところで、いろいろなものの区切りというか節目でありつつも、被災された方々にとっては区切りでも何でもない部分でもあり、そういったところをどのように私たちの方で対応できるのかというのは、考えていきたいと思っております。

今年度の取り組みに関しては、特に社協さんであるとか公民館の皆さんに事前に相談をさせていただいて、初めてのところでは、当日社協さんだったり公民館の職員の方に同席いただいて取り組んだり、ワークショップの中で住民の方がお話しすることを一緒に聞いていただいたりという場面がありました。

今おっしゃっていただいたように、外部の人間が来ることでいつも話題にならないことが話題になるとか、それこそ3月が近いので、震災に対しての不安や思っていることが口から出てくるという場面もありましたので、本当はこういうことを考えていたのだとか、こういうところに新しいニーズがあるのだなというところも、釜石市内大槌町内のいわゆる支援者の立場にいる方々と共有できた点もとても大きいと思っております。

来年度以降もなにがしかの形で検討する際にも、市内の協力団体の皆さんに相談しながら、同じようにはできないかもしれないのですが、何かできることはないかという前提で考えていきたいと思っております。

○委員

参加されている被災者の方々、高齢の方が多いたのですが、スマートフォンを持っている方はどのくらいいらっしゃるか、お分かりであれば教えてください。

○釜石まちづくり株式会社

スマートフォンを出す場面というのが私たちの事業の方では特段なかったのですが、割合としてどの程度というのは分かりかねるのですが、いわゆる2つ折りのガラケーがもう市場に出回らなくなっている関係で、いたし方なく皆さん携帯電話はスマートフォンという感じにはなっているかなと思います。ただそれを使えているという感じはあまり受けませんでした。

○委員

見ますと、ネタを出すのが被災者の方々の仕事で、それ以降は事業者の皆さんがやっけてらっしゃるのですよね。そうしますと、スマートフォンを持っているのであれば、写真を撮るや、あるいはワープロ打ちぐらいはできる方もいらっしゃると思うのです。そういった方々の仕事をもう少し増やさないと、被災者の参画には少々ほど遠いのかなという印象があります。事業者の皆さんが一生懸命やればやるほど、被災者の方々の仕事の部分が減ってしまうのではないかと、そのような印象を受けましたので、被災者の方々の活躍の場をもう少し増やしてあげたらいいのではという印象を持ちました。

○釜石まちづくり株式会社

参画の部分をどのように捉えるかということであるとか、どこまでを求めていこうかというのは、取り組んでいてとても悩んだ部分でもありまして、最初の部分から皆さんの役割はこうです、できる方はワープロを打ってください、写真を撮ってください、何をしてくださいというふうに開示してしまうと、皆さん、「いや、そんな難しいことはできません。」となってしまうことがあり、どのように役割を求めていくかというのをとても悩んだ部分ではあります。

それぞれお話しをしながら、この方はこういうことが好きそうだなとか、文章を考えるのが好きそうだなとか、題名を考えるのが好きそうだなとか、それこそ写真というところは、私たちの方で頭になかったので参考にさせていただきたいのですが、どういった形で役割を見せて求めていくか、一緒にやっていくかというところであったり、その度合いだったりというところは、今いただいたご意見をもとにまた改善をしていきたいと思えます。

○委員

1つだけ、参考までに。私は今から20年以上ぐらい前に釜石市に勤務したことがあるのですが、当時の釜石は新日鉄系の方々の退職者が多く、非常に熱心に当時のパソコンを習得しようというグループが活動しておりました。

今、いわゆるガラケーからスマートフォンに変わる時期で、その操作がなかなかできないというようなところで、よく地域では、若い人たちが高齢者にその使い方を教えるというようなサロンみたいなのができています。このサロンに若い人たちに来てもらって、高校生でもいいのですけども、若い世代がスマートフォンを教えるというようなことも、少しやられている地域もあるので、そういう形での新しい展開をなさってみてもいいのかなと思えます。

被災者に限った事業として今までやってきたとすれば、それをもう少し幅広に広げながら、高齢者の中でも、非常にそういうことが得意な方々が特に釜石の場合は多いという気がしていますし、若い世代がまた教えていくという新たな展開の中で、一緒にこういう新聞を作ろうというような組み立てもあるのではと思って聞かせていただきました。

○太田被災者生活再建課長

委員の皆様、どうもありがとうございました。それでは時間ですので質疑を終了したいと思います。

以上で、釜石まちづくり株式会社の報告を終了いたします。どうもありがとうございました。

(3) 公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

○太田被災者生活再建課長

それでは次に、公益財団法人音楽の力による復興センター・東北による報告となりま

す。それでは、補助事業の取り組み成果について、ご説明をお願いいたします。

○公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

公益財団法人音楽の力による復興センター・東北です。今年度実施いたしました、音楽と交流によるコミュニティ形成支援事業の取組状況や成果等についてご報告申し上げます。

本事業は、音楽を通じた心身のケアや生きがいづくり、住民同士の交流の機会の創出をとおり、高齢独居者の引きこもりの防止、被災者の心の復興、地域コミュニティの形成促進に寄与することを目的といたしました、プロの演奏家による参加型のコンサートを開催し、その実施に至るまでの過程から被災者の方々に参画いただくことで、ともに課題解決を目指しました。

取り組みの効果、特徴ですが、本事業の最大の特徴は演奏の観賞だけではなく、コンサート自体が参加型であることで、この頃は地元団体との共演を積極的に行うようになってきておりました。この参加交流の場面を通じて仲間意識が醸成され、地域コミュニティに良い影響を及ぼし、さらには一人一人の生きがいや生きる意欲にも繋がっていると感じております。

具体的な取り組み内容ですと、事前のリクエストからの年齢層に合わせた幅広い選曲で、イントロクイズや呼吸法の練習など、例えばですが、「君といつまでも」のセリフの部分をお客様に挑戦していただくなど、参加型の場面を多く持つようにいたしました。

また今年度は、小中学生による子どもバイオリン教室、高校、短大で合唱に取り組む学生、社会人合唱サークルとハンドベルの愛好者、80代になるフラダンスの講師などとの共演があり、共演した一人一人のモチベーションを高め、終演後、充実した表情が見られただけでなく、来場された地域の方々にも大変好評を得ました。

次に実績ですが、今年度は釜石・大槌・盛岡市内の16会場、計16公演を実施いたしました。猛暑の8月とお正月明けの1月中旬という時期で、訪問時期としては決して気候の良い時期ではありませんでしたが、昨年度の496名を大きく上回る615名の参加がありました。中でも、釜石平田公民館では、公民館の自主事業として市のマイクロバスを借り上げ、12名の住民とともに隣の唐丹公民館公演に参加してくださいました。足のない高齢者の皆様には大変喜ばれ、また甲子公民館では、近くの就労支援施設から初めて20名近くの参加があり、障がいを持つ方々も一緒に楽しむ時間となりました。1月の大槌町の柁内地区では、初めての訪問でもあり15名程度の予想としておりましたが、40名が詰めかけ、ここにこんなに人が入ったのは見たことがないというふうに、民生委員の方がおっしゃっていました。

次に具体的な効果になります。アンケートの自由記述の方からかいつまんでご報告いたします。引きこもり防止ですが、「来てよかった。」、「このコンサートを生きがいにしています。」と、大げさなようですけれども、直接このようにお話しくださる方が何人もいらっしゃいました。遠くまで出かける足のない高齢者には、こちらから地域に向くアウトリーチが大きな意味を持つことを実感いたしました。

心身のケアや生きがいづくりに関係して、こちらの方はアンケートそのままなのですが3枚目にご紹介しております。参加された皆さん、「生き生きとしていて元気をもら

いました。」、「すばらしい歌声に癒されました。」、「大きい声を出して歌うことでリフレッシュしました。」、「大槌小中学校の生徒さんたちの演奏に感動いたしました。」ということで、こちらが思っていたことをすべて感想としてお伝えいただいた方がいらっしゃいました。演奏に触れ参加したことで起こった心身の変化や、演奏に感動し心を動かされること自体が、心身のケアにつながっているのではないかというふうに感じました。

目的の達成状況の方です。本事業については、猛暑による外出控えや、季節を問わずに流行するようになりましたインフルエンザなど感染症の影響などもありましたが、当初の目的は概ね達成することができたものと考えています。特に今回、審査会でご指摘いただきました、初めての新たな会場でということもありましたが、大槌町の浪板地区、それから柁内地区については、大槌町社会福祉協議会の協力を得ながら、地元からの要請ということで初めて開催することができました。

事業参加人数ですけれども、延べ人数に対する災害公営住宅居住者、こちらには自宅を改修した参加者も含まれますが、全体の42.1%ほどとなっております。

今後の事業の見通しですが、いずれの会場でも、今回がおそらく最後になるかと思えますという話は最後にさせていただきましたが、また機会があればということで、皆様からお話をいただきました。今後は演奏家や行政、それから県内の系列文化振興団体の中間支援を行う団体の方に、何か活動の継続方法がないか引き続き働きかけていきたいと思えます。また次の災害に備えて、これまでの実践から学び取ってきた課題や課題解決のための提案を、音楽家や各地域の協力者とも共有していきたいと思えます。以上になります。

○太田被災者生活再建課長

ありがとうございました。それでは、委員の皆様方から、ご質問やご意見をお願いいたします。

○委員

今回、他の団体さんにもお伺いしていることと同じく参加人数のところなのですが、避難先住民というところに入っている数字は、地域住民と見て良いのでしょうか。

○公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

正直迷いまして、こちらは実際のところ、お住まいが釜石市の内陸ですとか、地域住民の方の中に転入者の方が随分混じっていらっしゃるようなことも実感しておりました。アンケートを見ても、迷われていらっしゃるというのが正直なところでしたので、こちらは実績として、避難先住民と地域住民とを合わせてというつもりで回答しております。

○委員

はい。ありがとうございます。

この事業は長く続いている事業なので、恐らくここに項目が残っていて、みなし仮設

などはもうないので、ここは合計してみても間違いはないという理解でよろしいですね。

また同様に、特に孤立している方というところの計画時の人数は、多分これは予測なのでそこはいいのですが、実績のところは、公営住宅88、その他98で186という数字が載っています。この方々はどのような属性から、孤立してらっしゃる方と捉えられたのでしょうか。

○公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

実際このところは、やはり私たちのようなハレの日を届けるだけの活動ですと、アンケートだけでは読みきれないなと感じておりまして、お答えできませんとされていた時期も長かったのですが、今はアンケートに一人暮らしの方という回答があった方を挙げておりました。

○委員

はい、わかりました。ありがとうございます

○委員

釜石の甲子でやられたときの就労支援ということは障がいのある方々ということですね。これまでもやられているのだらうとは思いますが、沿岸地域の障がいのある方々の音楽活動もありますので、可能であれば今後は是非、障がいのある方々の音楽活動ともコラボしていただければと思います。あと私、南青山の方にもお邪魔させていただいて、あれは盛岡大学の短期大学の学生たちが参加をしております、プロの方々だけのコンサートより、また少し違ったあつたかさというか、そういうものを感じて聞きました。多様な方々も参加しながら、プロの方々と一緒になってやるというようなことを今後もやられると、より良いのではと思って聞かせていただきました。以上です。

○公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

ありがとうございます。

甲子は公民館長さんが今年度から変わられた方として、その方からお声がけいただいたことがきっかけなのですが、思っていた以上に人数が多く、これまで甲子には3度、4度伺っていたのですが、やはり合唱サークルの方がほとんどで、参加者が20名程度、25名まで行くかなという人数だったのが、今回は60名近くでした。町内会を通じてなのか、男性の方々の参加も今回非常に多くて、その就労支援の方たちも多くいらっやっやいて、その中のお一人が「君といつまでも」のセリフに挑戦してくださるということまで起き、職員さんも驚かれるということがありました。

大槌町の榎内地区もデイサービスセンターが近くにあり、またこちらの運営が大槌の社会福祉協議会だったこともありまして、そちらから3名の職員さんがご参加いただいたということもありました。

また地元の町場の方達や学生さんの参加なのですが、2月に宮城県で「公民館でみんなでコンサート」という名前で、障がいのある方もない方も一緒にという趣旨で活動しているのですが、その時に地元の中学生と一緒に演奏してくれたりですとか、放課後デ

イサービスに通っている小中学生が1曲ダンスで参加してくれたりということもあり、即興だったのですがそのような場面がありました。来ていた地域の方々がその子どもたちに対してのエールといいますか、応援の気持ちですとか、そのような場面があったことでの一体感をプロの演奏家の方も強く感じて、「とてもよかったですね。」というように後から言われました。

そのような思いがけない効果というものがあるのだなとこちらも感じましたので、この後も折りに触れて、地域の就労支援団体などには声をかけるようにしていきたいと考えているところです。

○委員

細かいことでお聞きしたいのですが、この財源である復興財源というのは、震災被災者を対象にしているものだと思っておりまして、釜石の内陸地区、例えば橋野地区、栗林公民館とか橋野町とか甲子とかですね、小佐野も多分そうだと思うのですが、内陸で震災の直接的な被害が少なかったような地域で開催した理由があれば、お聞きしたいです。

○公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

橋野はお伺いしてみると、実は沿岸からの転入者というのは少ないところではあるのですが、一昨年までは鶴住居にも半年に1度ずつお伺いしていたところ、なかなかそのペースでお伺いすることが難しくなったこともありまして、地域交流ということも含めて、橋野と鶴住居に年に1度ずつというように計画を途中から変えているところがありました。併せて「鶴住居歌う会」さんに橋野の方にも出演いただくということで交流の機会をとということと、それからやはり転入された方を誘い出すきっかけにということで、橋野の方にお伺いしたところです。

小佐野と甲子については、転入された方が非常に多くいらっしゃいまして、最初に小佐野に伺ったときは、公民館さんからはそんなにいないと言われたのですが、アンケートを見ると本当に随分、転入してきましたというお声が多かったということに後から気づきました。そのあと、小佐野公民館での公演については、甲子にも中妻にもお声掛けをするというように協力をいただいて、転入された方々にも一緒に楽しんでいただきました。

また特にですが、被災された方だけではなくこれから暮らしていく、地域に溶け込んで、被災したしていないではなく、同じ地区の住民として一緒に生活していくというような環境づくりのためにも、全ての方にもご参加いただきたいという趣旨のもと、各地で公演をしております。

○委員

ありがとうございます。

やはり橋野の方は被災者の方は比較的少なかったということですね。分かりました。

○委員

長く続けられてきた事業なので、地元の方を巻き込むというのをとても頑張って広げられてきたなというのを感じながら、今日伺っていました。

以前、補助金がないと事業を続けるのは難しいという話も伺っていたのですが、この事業は岩手でぜひ続けていただきたく、この後の見通しをどのように持っているのかということも1つ伺いたいです。

また、岩手、宮城はほぼ終わるような復興の計画になっていますが福島はまだ続きますし、これからもどこかで大きな災害はまたあると思うので、岩手以外の他県でこのようなことを続けている事例があれば、参考までに教えていただけたらと思います。

○公益財団法人音楽の力による復興センター・東北

次年度以降の見通しということなのですが、現実的なところでは釜石市の方には、釜石高校音楽部のボイストレーニングですとか、別の民間助成金を通じて昨年度とその前にもお伺いしております、来年度も同様の活動について申請をしています。ただこちらは子どもたちを活動のメインの対象にしてくださいという条件がついておまして、また、東日本大震災ということも名称についている助成金なものですから、お伺いするのは子どもたちが集まる場にはなるのですが、これまでお世話になりました災害公営住宅の近くが会場の場合には、そこにお住まいの皆さんにもお声がけができないかというように検討しておりました。

あともう1つは、釜石市のまちづくり課さんとは相談しております、市の直接の事業ではないのですが、公民館を窓口とした地区会の事業として主催いただけないだろうかというお話しをしてはいるのですが、職員の皆さんの異動もありますし、また本当に地区の皆さんの総意がいただけるかどうかというところで、こちらはまだ相談中というところですよ。

あとは福島を初めとした県外のことなのですが、正直、私どもの事業が始まったときにも公益財団法人化するときにも、活動範囲として岩手宮城福島と3県を入れているのですが、福島県の心の復興事業が主体となる事業所の拠点が県内にないと申請できないというように数年前に変わり、私どもは申請できなくなってしましまして、自主事業として今までに1度、今年度富岡町のサロンにお伺いしたというのが現状です。

宮城県についても同様なのですが、宮城県、仙台市それぞれで、被災者支援ということに限らずにアウトリーチ支援の方で、新たな事業が数年前から始まっておまして、こちらは子どもさん向けのもの、あとは地域コミュニティを対象にしたもの、もしくは劇場に足を運ぶことが難しい方々を対象にしたものということで、そちらの方で委託事業を受託しているところですよ。

また、少し時間が経ってしまいましたけれども、熊本地震がありましたときに、あちらの方から活動の参考にしたいということで、正式名称は忘れてしまったのですが熊本で「100人委員会」という組織が音楽関係者で立ち上がりまして、その方たちが仙台の方に話を聞きにいらっしゃった後で、仮設住宅などでのアウトリーチコンサートの活動をしばらく実施されておりました。ただそちらもほとんどが東京からプロのミュージシャンを呼んでという形でしたので、交通費のことなどもありまして、もうすでに活動が

終了されているかと思えます。

あとは、私が個人的ですが理事を務めております横浜のNPOで、こちらは赤十字の助成金を使いながら、月に1度音楽家が土日それぞれ2公演ずつですけれども、珠洲市の方で活動しているという団体があります。

○太田被災者生活再建課長

委員の皆様、どうもありがとうございました。それでは時間ですので質疑を終了したいと思います。

以上で、公益財団法人音楽の力による復興センター・東北の報告を終了いたします。どうもありがとうございました。

ではこれをもって、事業者による成果報告は終了となります。ありがとうございました。